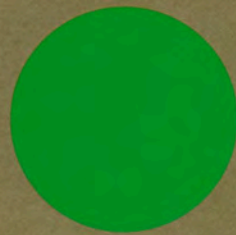


国立

奥多摩

美術館



The National Museum of Art, Okazaki

13日間のプレミアムな漂流

2014年9月13、14、15、20、21、27、28日

10月4、5、6、11、12、13日

<http://moa.jp>

こようちひろ



〈a〉2013

Chihito
COYO

こようの絵は「開いた絵画」であり、一つであると共に同等な複数の個が内在する。では、閉じた絵画とはなにか。それは初めの一筆が痕跡として表出し、その痕跡が次の行為を芽生えさせ、その行為の連鎖が画面に満ちたとき、調和を生み、四角い画面と現実世界との境界を創出した絵を指す。そして、その連鎖によって、各モチーフに対する明確な差を意識することで、画面内の主題は中心に座る。

ただ、こようはそれを拒否する。各モチーフは一見分析しているように見えるが、画面統一による差異はなく、同等な複数として、一つの画面内に描かれる。そのため、主題に中心を譲らず、一つの中心にまぎれることなくすべてが前景化する。また、余白や隙間が各モチーフの関係性や差異を探る意識を働かせることは言うまでもない。

しかし、中心の無き主題となってもモチーフの関係性から物語やいち場面を想起可能なのはなぜか。主題の中心性が絵画の内容を意味決定する訳ではないということだろうか。



〈ar〉2013



〈d&p〉2014

これはイカかではない

赤石隆明



〈Works and odds and ends #4 (Carpet and Photograph2)〉2012

フィルムからデジタルへ移行し、インターネット、SNSへ波及し、溢れる写真。そして、誰のものともなく暗闇へ息を潜め、忘却の彼方へ着岸する。しかし、写真とは忘却の真逆にあったのではなかったか。

赤石は写真を既成の物や自身で制作したオブジェクトにまどませ、イメージを生成する。レンズを始点とした視界の固着から逸脱し、視線に浮遊の自由を与える。また、過去作からオーバーラップし、可変する仕組みは初作からの作品が起点となり、構造が形成され、作品全体の強度が増していく。

私たちは忘却へ着岸した写真と赤石の作品に形体や色、掬えた光などの繋がりを見たとき、赤石の作品と作品との隙間へ挿入し、構造へ落とし込む。つまり、忘却された写真が構造へ組み込まれ、関係を結び、更に強固な構造となる。そして、赤石の作品は体積を増やし、写真の複数性を展示空間の外に、私たちの中に求める形へ飛躍していく。



〈Calculus #5〉2014

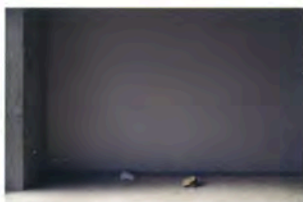
AKAISHI
Takaaki



〈Hope in the Dilapidation〉2010

あなたの未来も享ルンDEATH

武田 龍



〈描写〉2013

TAKEDA
Ryu

武田は土地について「見えない」ものと口にする。一般的に「見えない」は視界から外れ、対象の存在を感知できない状態を指す。しかし、武田の「見えない」はその意とは異なる。

武田が一貫して取り組む問題は素材がいかに流動的で、見る者の立場や状況により起こる捉え方の変化である。武田の作品に使用される「土」は誰かの所有物とされる土地であり、陶器などの

製造品の原材料、地形や輪郭などである。それらは意味やカテゴリーの分類、象徴化された言葉により多様な種を見て取れる。しかし、「土」という言葉により一つの根へと引き戻される。日常では並列し、同時にその体系を見ることはない。つまり、同時にすべてへヒントを合わせられない意として武田は言うのである。

日常にある事物を取り込み、作品と日常の境や美術の形式やルールの有用性と適用範囲を確かめるように、その境を武田はゆらゆらと徘徊している。ただ、素材の移動と行為の痕跡として表出した穴の存在に何を感じたのだろうか。



〈Motorcycle〉2012



〈土地〉2013

紅色の隠し扉

松尾勘太

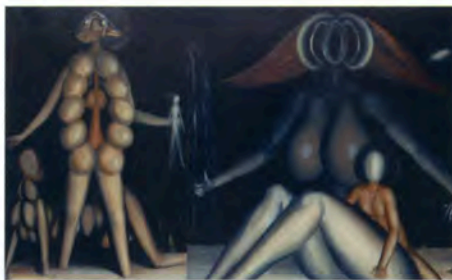


〈untitled〉2013

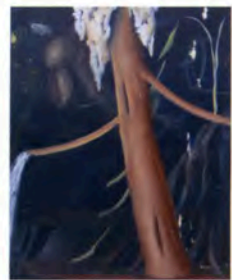
MATSUO
Kanta

松尾の絵を見たとき、「恐怖」、「不安」が込み上げる。均整のとれた世界は失われ、感情の揺らぎを助長する。画面内に私たちと同一種らしき外見の持ち主が現れる。ただ断定できないのは動物や植物など他の生物の形体を帯びていることにある。繰り返される形体、崩れた寸尺、重なるイメージが一枚の画面内で統制を回らうとしている。恐怖や不安を追い払うかのように、私たちとの差異を画面から汲み上げ、同類として交わりたくない心境が生まれる。

ただ、比較し、差別することは既に一つの同じ土台に挙げている。対私たちとの比較には同じ従属を受け、同一性を肯定することからしか、差異を見ることはできないからである。画面内の生物や私たちの世界について、同定と差別の思考を往来させることによって恐怖や不安は更に増長する。しかし、その一方で遠ざけていたそれらとの差異が些細であったり、共通項が見えてしまったりすると、私たちは黙認するか二度見するかのどちらかだろうか。



〈untitled〉2013



〈untitled〉2013

ミミスマセラバトガスル

●本展の作家のブロック分けについて

本展では5つのブロックを設けた。作家の姿勢や主とする取り組みの方向性がたがう中で、棲み分けではなく、衝突と接点の表出を試みている。

定式への疑惑

美術の諸分野から素材や媒体の特性、また表象行為へ懷疑心を示し、二次元と三次元での素材の流動性、単数性と複数性、全体と中心など根本的な形式に取り組む作家たち。

山本 篤



《the Custom-made street funkiness》2012

山本の作品には可笑しなことをする人が現れる。誰に向け、何のための行為かについては一切語られることはない。映像を見る私たちへ向けての行為だとしても、その行為の目的や登場する人物の情報が削ぎ落とされ、明らかにされない。

その無名性ゆえ、行為から表象が剥がれ落ちる。ただし、それは行為と表象を引き離し、

行為の純粹性を高め、保持し、表象の修復を行うためである。その純粹行為を極端的に徹底して繰り返す、集約された映像の中で、「人間の本质とは何か」についての逆説的な状況を見て取れる。つまり、人間以外の他の生物、あるいは人智を超えた神の対義語としての私たちがあり、人間から他への可能性を探ると同時に、可能性の行き届かない身体という器を持った人間が同時に写し出されているのである。

カメラによって映し出される淡々とした事実と山本やその他の登場人物が体現する事実の対峙がより一層明確に人間とそうでないものの濃淡を作り出す。



《Sunny days in Thailand》2013



《キヤタラ祭》2012



元祖！神々に愛された撮影古事記

YAMAMOTO
Atsushi

永畑 智大



《日本一へたな芸術の店》2014

永畑の作品は「具体と飛躍」である。彼の造形物には「らしさ」が潜んでいる。新聞やガムテープ、発砲スチロールなどを主な造形素材とし、現れた形体は人体、女神、頭部など、一見して誰もがそれと分かる具体形体を持つ。その反面、それらの造形物には永畑が集めた日用品や工業用品、家電等との組み合わせ、あるいは動力装置によって与えられた動きにより、それまで感じ取っていた「らしさ」から飛躍し、私たちの推測を裏切る。

しかし、私たちが感じ取る「らしさ」の確定要因は何だったのか。それは作品へ向ける眼差しの中に親しみを含み、日常的な場での行いが地続きに持ち出されているからであろうか。

そこには造形物に対する永畑の振る舞いがヒントになりえそうだ。物同士や物と地への接続面、台座、重力、物としての単一性など彫刻における基本的問題を飄々と超えていく奇抜な解答と試みは、様々な眼差しの性質を暴露するようでもある。



《絶滅ワンダーランド》with ニコニコ山原 2014

NAGAHATA
Tomohiro



《ニュートンと恋の吊り橋理論》2012



夜空を見あげれば星がある

小鷹 拓郎

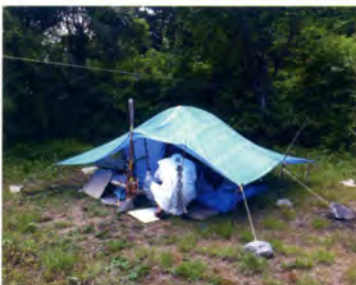


《ポテトとアフリカ大陸を縦断するプロジェクト》2010

小鷹は疑わしい噂や自らついた嘘の検証をする。疑わしい噂とはアフリカにポテトがない地域の有無を確認すべく各民族が生息する土地を訪れ、墜落お運路村が存在すると聞けば巡拝し、検証する。一方、小鷹の嘘とは妻をオノ・ヨーコとし、パフォーマンスを披露する。

その検証により真相究明し、真実を捉えるのではなく、リアリティが生まれ、私たちが共有される瞬間を小鷹は映し出す。小鷹は道中で人に話かけ、対話の中で個人の知識や記憶を前提とした事実を引き出す。その中ではアフリカでの各民族や88箇所を巡拝し疲弊した小鷹の姿と四国の人々、オノ・ヨーコとして接するヤンゴンの人々は私たちが何も変わらない存在に見える瞬間がある。小鷹は自身と映像中の他者との距離を実測し、互いに近い存在であることを見せる。そうして、検証に巻き込まれた者の言葉や小鷹の姿により、表面的な固定観念や真偽に対する捉え方が崩されていく。小鷹は問う「お前には真実が見えてんのか」と。

KOTAKA
Takuro



《墜落お運路村から学ぶ、愛と平和のディストピア》2014



《僕の代わりに妻のオノ・ヨーコがパフォーマンスをします》2012



放送禁止のブルン滞在記

牛島 達治



《SEV》(手前)、《SWM》(右奥) 横浜HHS「撤収」展の展示風景 2014

「事象」とは始まりと終わりがあり、前後に明確な変化や影響をもたらすことである。牛島が作り出す事象は私たちが生きる三次元の世界で視覚的確かさや素材を作品の一部としての再提示からの解放を見て取れる。

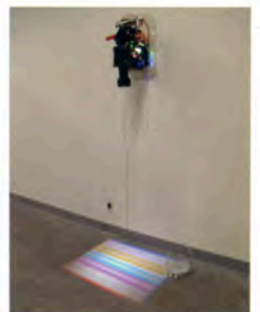
例えるなら「雨」は私と風景の間に入り込み、空間を占め、物質として空間を上下に切りながら降る。しかし、地に落ちればコンクリートを黒く染めるシミ、水たまりや上昇した川の水位など事後のもの

へ変化してしまう。捉えられない物体と動きの関係は牛島のオブジェクトと動力そのものである。ただ誤解がないように言えば、牛島の作品は事象の想起や頭の中での再現ではない。事象そのものを彫刻化した作品は作品内部に流れる時間と鑑賞者が持つ時間が同調する。ただ、事象を目の前にするだけでなく、雨の落下を見ながら、傘の上をはねる音聞き、ハンドルから伝わる振動を感じるように、巻き込まれ、経験として私たちの中に書き込まれることを望んでいるのであろうか。

USHIJIMA
Tasuji



《海水循環》2007



《空の端のそと》2014



熱いハートに駆け出すアルミ

人間への愛と本質

一見すると、人間の存在を危ぶむような内容とも見えるが、人間の可能性を信じている純粹さで溢れている。人間の本质を探り、まだ見ぬ人間の可能性を見出そうとする作家たち。

四次元への架け橋

日常で物に接しないことは皆無である。しかし、彫刻は「物であり物ではない」、それは眼差しの性質を解き明かすことからでしか捉えられない。そのことを指し示す作家たち。

Colliu

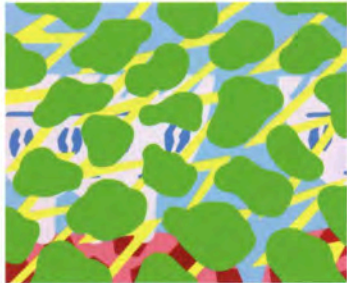


Colliuが描く人物はZ型や単純化された線の目を持つ。その目から飛び出すカラフルで光を思わす直方体。目や顔などに貼付く人や動物などのアイコン。画面内に視界を塞ぐように配置される図形。

それらは私たちと描かれた人物の視線を遮断するように挟み込まれ、私たちの直視を阻む。注視しようとも、簡略された線と色面の人物には多くの情報はなく、「こちらを見ている」という強烈な視線が私たちの視線を押し返すのである。その時、光、アイコン、図形へと再度私たちの意識を引き戻させると共に、私たちと描かれた人物の視線が変わることを認識する。そこで初めて、両者の交差した視線は私たちと人物の間にあるそれらを共有する働きが生まれる。

そこには見ることや見えてしまうことによって所有された記憶が入り混じる。それは「涙」によってぼやけながら、対象を見ている状態に似ているかもしれない。Colliuのイメージ発動の起点は「涙」のようなものと「記憶」にあるのだろうか。

Colliu



〈むこうがわ1〉2014



〈無題〉2014

野に咲く花のように。

和田昌宏



〈主婦のためのスタイリッシュなハエ〉
2012-2013

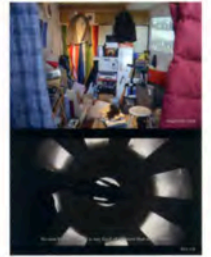


〈A Song For My Son〉2013

妻、義父、主婦、知人、夢、労働。これらは近年の作品に登場する主題である。和田という個人に近く、内在し、直面する問題が浮き彫りになる主題であり、不特定に共有可能なほど私たちの側にもある。そのため、作品中の各主題が私たちのギアを緩やかに変速し、各主題に内在し、関係する問題を提起させる。

2013年の黄金町での作品《A Song For My Son》は好例である。黄金町は風俗店が軒を連ねていた歴史を持つ。行政はそれを摘発し、市街整備と美化を行った。過去を消すようにアートで歴史に蓋をした。和田個人の目線から美術を扱う行政や社会の表面的で冷めた視線と会場内に放たれた蚊への鑑賞者の視線を重ね合わせる。また、和田は労働を主題とし、貨幣を生んだ私たち自身が不平等を作り出した事実を突きつける。しかし、そのことを誰かに怒り、対立を生むことで何かを変えたことは過去にあっただろうか。ただ、私たちは互いに繋がりが合い、協力し合うことでしか、前進はできない。そのことを和田は唄った。

WADA
Masahiro



〈村上裕〉2012-2013

西東京のビッグデータ

二十二会



〈目に殴られた @ TRANS
ARTS TOKYO〉2013

NIJYUNI-KAI

二十二会(遠藤麻衣・波辺美帆子)は日常に氾濫し、交差する視線をすくいあげる。その視線の性質を読み解き、作品へ持ち込む。演劇作品の《目に殴られた》では演者と鑑賞者の関係を反転させ、鑑賞者は演者の指示のままに行動し、作品の一部となり、「見られる」対象となる。

私たちは普段「見られる」対象として人の目に晒されている。そして、互いを監視し合うことで秩序を

形成する。「暗黙の了解」もその一種である。視線や状況により、他者と共犯関係を結び、作られる秩序の典型である。ただし、そこには横の繋がりでなく、縦の従属関係やパワーバランスが潜んでいる。

もはや、互いに「見られる」対象でありながら、平等に他者と繋がらう視線や状況は存在しない。

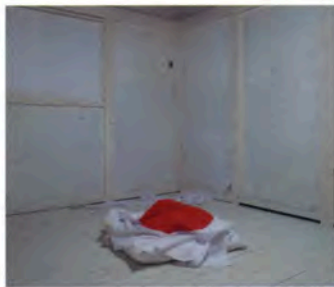
他者との対面であろうと他者の視界の一端になろうと、普段、従属関係を結ばれていることに無自覚で、自然な行いとして

いる私たちの視線はいつまでも不平等なままなのであろうか。



〈へんな動きの妖!精!HO!〉
2014

へんな動きの妖!精!HO!



〈目に殴られた @ 22:00 画面〉
2014

「見る」「見られる」の関係性

「見る」という行為には所有の意を内包する。つまり、「所有する」者と「所有される」者がいる。人間の原初的な行為である「見る」「見られる」にまわりつく性質を読み解く作家たち。

関野吉晴



メコン川源流を下る (中国 青海省)
撮影:山田和也 2007

Yoshiharu
SEKINO

約700万年前にアフリカで誕生した人類。私たちの祖先ホモ・サピエンスは20万年前にアフリカ大陸で誕生し、約6万年前にユーラシア大陸經由から世界中へ移動し、生活圏を拡大した。その壮大な旅を「グレートジャーニー」と言う。

関野はその壮大な旅を選った。高度文明の移動手段を取らず、徒歩、自転車、カヌー、犬ソリなど人力や人の力で操作可能な方法で巡った。その理由は先祖が生み出した智慧や行いを体験

することで、先祖や現地の民族と同じ目線で世界を見ることにあった。先祖が築いた風習、経済、集団制、社会など、各大陸で先祖が苦難を乗り越え獲得した智慧は人類の宝物であり生きる「欲望」そのものとも言える。

今日、私たちは快速で物溢れる文明を築く一方、大量破壊兵器、貧富の差、環境汚染など負の側面も抱える。私たちは現代文明が抱える問題をどう解決していいのか。関野が40年以上地球を這い、地球や伝統社会から得た中には私たちが必要とする智慧が眠っている。



ベネズエラのヤノナミ 1987



ペルーアマゾン
のマチゲンガ 1982

ニュー・スタンダードの確立

自身の周辺から世界へより広く目を向け、他者に内在する智慧や問題を浮き彫りにする。過去へ目を向け、内省し、未来への切り札を持つ。新しい世界の始まりの起点になる作家たち。

ごあいさつ

このたび、「国立奥多摩美術館」13日間のプレミアムな「漂流」を開催いたします。

二〇一二年開館しました本美術館も、二年という歳月、雨風に耐え、そして今年の大雪。あと一日降り続いていたらつぶれていたのではないかとという自然の猛威に脅え、更なる進化をとげてこのたびの展覧会開催に至りました。

今回は「13日間のプレミアムな漂流」。

道が整備しつくされ、いたるところに解説や注釈があふれ、自分の意志を超えたところで全てが調合されている現代。自分の意志を超えた大きな力によって流され、漂うという意味においては、過酷な漂流の真ただ中にあるのではないのでしょうか。

私はそんな状況の中で、嬉々とし悠々と舵をきる人たちを知っています。

今この世界を一緒に生き、漂う13人の作家たち。

今私が考えうる最高の作家たちによって本展覧会を開催するにいたれた事を心から嬉しく思います。

都心からは約一時間半と遠い山中「国立奥多摩美術館」ですが、この機会にぜひ足をお運びいただき、各作家・作品に直接ふれていただきたいです。そして皆さまの日々の生活の中で漠然と感じている、言葉にならない「何か」に向かい合う瞬間になりましたら、私のこの上ない喜びです。13日間という短い期間ではございますが、心より皆さまのご来場をお待ち申し上げております。

館長 佐塚真啓



美術館と12個の問いとわたし

参加作家を紹介する命を館長より拝命いたしました。

私が各作家や作品に向かい得たもの、それは「美術は怖い」という認識である。以前の私ならば作品から新たな発見、作家や作品との共鳴により高揚感を覚えてきた。しかし、その考えは間違いだ。

例えば、日常生活を営む上で「当然なこと」「正しいこと」として他者と共有していた確信が崩壊し、普遍性が崩れ落ちた時「確かな物は何か」という新たな問いを見出すことは美術の一つの役割である。しかし、日常を生きる上で、信頼を置いた事物の崩壊は楽しむべきではなく、むしろ「恐怖」や「不安」を抱くことこそが自然な反応と言えないだろうか。そもそも、これまでの自分を否定され、信頼するものが消え、不安や恐怖にあおられている状況を「楽しい」と言う人は一般的に「真ッ当な人ではない」と思うのである。

しかし、唯一私たち人間に許されたことは作品鑑賞から能動的な姿勢で問いを見出し、解答の有無すら危うい中で、可能性を求めて思考を深めることである。恐怖や不安から脱却し、新たな希望を掴み取ろうとする姿勢に私は改めて人間らしさを感じずにはいられない。

故に、本紹介文は来場者へ投げかける私からの問いである。



ナレーター 蛭川千春

9月の開館日

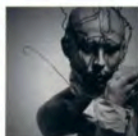
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9月のイベント

- 13日(土)
17:00 プレミアムなオープニングパーティー
19:00 ゲストパフォーマンス舞蹈「城」(小林優太)
- 14日(日)
16:00 そうだ!松尾さんに聞いてみよう(松尾勘太)
23:00 リゾートハワイアン奥多摩・夜の宴
- 15日(祝)
13:00 ハッピーBBQ
- 20日(土)
13:00 サバイバルBBQ
- 21日(日)
15:00 勝手に☆考古学(武田龍)
- 27日(土)
15:00 OZMZワークショップ(山本篤)
18:00 キャタラ祭り
- 28日(日)
15:00 美術は人のためになるのか?
(袴田京太郎×加藤翼×佐塚真啓)



ゲスト(左から)
小林優太
MARK

10月のイベント

- 4日(土)
13:00 遠藤麻衣のワークショップ(二十二会)
15:00 渡辺美帆子のワークショップ(二十二会)
18:00 アートで朝帰り
- 5日(日)
13:00 国立青梅からマラソン(佐塚真啓)
15:00 Colliuさんの大道芸(Colliu)
16:00 イルカとかの絵について(こようちひろ)
17:00 小鷹拓郎スペシャル企画(小鷹拓郎)
- 6日(月)
12:00 アップルBBQ
16:00 フリーター・ニート緊急大会議
- 11日(土)
10:00 ヒマラヤ山行接待(赤石隆明・佐塚真啓)
17:00 奥多摩に流れついた男たちの詩(永畑智大)
- 12日(日)
14:00 捕獲(和田昌宏)
18:00 ゲストライブ♪(MARK)
- 13日(祝)
15:00 風の谷の男の話
~100人分の豚の丸焼き晩餐会~
(牛島達治×関野吉晴×佐塚真啓)
20:00 閉会式

関連情報

アートスペース「モデルルーム」でも
展覧会が同会期にて開催されます。
6駅隣「東青梅駅」北口 徒歩1分。

●再想起展 開館12~21時
糸川ゆりえ 連日イベント多数
太田遼 東京都青梅市
多田ひと美 東青梅2-16-16
土谷泰彦 mdlroom.com



- 電車
1. JR中央線 立川駅
2. JR青梅線 青梅駅
3. 軍畑駅(いくさばた)
4. 駅から徒歩約13分
- 車(駐車場あり)
日の出I.C. から約10km
青梅I.C. から約15km

開館時間12~20時 入館料500円(会期中は何度でも入場可能です)
〒198-0171 東京都青梅市二俣尾5-157 お問い合わせ info@moao.jp

企画: 佐塚真啓、永畑智大
蜷川千春

flyer design: 牧寿次郎

web design: 秋山貴典
coding: 阿部浩之

広報: 小堀望

協力: 秋葉大介、高村瑞世

助成: アーツカウンシル東京
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

ARTS COUNCIL TOKYO